



作並・回文の里 タイムス

【編集・発行】

回文の里づくり実行委員会

〒989-3431

仙台市青葉区作並字相ノ沢 27

JR 作並駅内宮城地区観光案内所

電話 022-395-2052

発行者：委員長 森谷 寛

編集：事務局 佐藤照彦 相沢良雄

早坂茂雄

作並・回文の里タイムス発刊にあたって

回文の里づくり実行委員会委員長 森谷 寛

このたび、「作並・回文の里タイムス」を発行することになりました。私も作並地区において本格的に回文の里づくり活動に取り組んでから、十年目を迎えたわけですが、このような全国でも珍しい活動について、まだまだ広く知られていない状況です。そこで、その原因が広報活動の弱さにあったからではないかと考えこの拙紙を発行することにした次第です。

今後、可能な限り私どもの活動の一端を多くの方々知っていただけるように、全国回文コンテストや交流大会の様子、回文教室や小学生の回文かるた大会の開催の様子などをお知らせしていけるようにしてまいりたいと考えておりますので、情報提供やご感想の寄稿など様々な面でのご理解とご支援をお願い申し上げます。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

各旅館・ホテルに回文ポストを配置

昨年十月から十二月にかけて行われた仙台・宮城ディステーションキャンペーンに合わせ、回文の里づくり実行委員会におきまして、「回文ポスト」を作り、温泉地内の各旅館・ホテル、ラサント、作並駅構内の宮城地区観光案内所にそれぞれ配置しました。「旅の思い出または旅行期間中の戯れはたまたまお慰めに一興」ということで、気軽に投函いただく

うというものです。回文をひねって投函してみましよう。



ウイスキー樽で作った回文ポスト

作並湯の駅“ラサント”がオープン

昨年十月十九日、作並温泉地内のほぼ中心地に、仙台市作並観光交流センターがオープンしました。愛称は「作並湯の駅ラサント」です。「ラサント」とは、ウイスキー発祥の地・スコットランドの言葉で「温かさ、温（ぬく）もり」を意味するということ、作並温泉の施設として大変ふさわしい愛称であるとされています。施設には、展示室・集会室・休憩室・喫茶室・足湯等が整備されており、展示室には、仙台市出身の画家・小野寺純一氏の作品とともに回文コーナーも設けられています。

また、回文ポストも設置されており、作った回



国道48号からのラサント

回文コーナー



展示コーナー

文をそのポストに投函することもできるようになっています。オープン以来、月平均三五〇〇人が立ち寄っているというところで、これからの本格的なお出かけシーズンの到来で、ますます多くの人の来場が期待されています。

一月三十一日(土)に回文かるた大会、二月七日(土)に回文教室が開かれました。いずれも仙台市宮城西市民センターと回文の里づくり実行委員会の共催でした。

熱気ムンムンの「回文かるた大会」!

一六枚でした。

回文かるた大会には小学生十四名が参加。四年生以下と五年生以上の二クラスに分かれて熱い戦いが繰り広げられました。一人四回戦で合計の取り札の枚数の多さで順位を決め、各クラス一位から三位には、三千円から一千円分の図書カードが賞品として贈られました。また、参

者全員に作並こけし工人平賀輝幸さんオリジナル作品のこけしの玩具が贈られました。四年生以下は六人が出場。第一位は、作並小学校四年生の早坂希さんで、取り札数は合計で一四枚でした。五年生以上は八人が出場。第一位作並小学校の五年生林楓さんで、取り札数は合計

【平成二〇年度回文かるた大会・回文教室を開催】

大人も子供も 考えて考えて、ただ無我夢中

回文教室には、子供たち十一人、大人九人合計二十一人が参加しました。講師は、回文の里づくり実行委員会の委員でもある作並小学校の田副公一校長先生。午後二時から始まった教室では、田副講師オリジナルのテキストをもとに、「準備運動」「軽く練習」「作品作り」の流れに従って、

練習題の「いか」「すきやき」などを使って、五文字や七文字程度の回文から徐々に長くしていく、できるだけ意味が通じやすい回文の作り方を学んでいました。子供たちは上達が早く、みるみるうちにひねり出していました。田副講師は、「学校で毎年かるた大会や、国語の授業で回文作りをしているからか、すごくいろ



真剣さ丸出しの参加者



言葉のあやつりに夢中な参加者

いろなことばを知り、使い方も上手くなってきている」と話していました。

第11回全国回文コンテスト・交流大会への作品の応募が続々

第一回全国回文コンテスト・交流大会の郵送の部への応募が昨年十二月三十一日に締め切られました。その応募数は、昨年の倍近い六七三点でした。内訳は、句の部一六九点、歌の部五〇点、自由の部三七九点、チビツ子の部七五点でした。自由の部において神戸市内のある高校から多くの作品が寄せられたこと、二回目となったチビツ子の部で多くの作品が寄せられたことが、応募点数を大きく押し上げた原因となっています。

一方、交流大会の方は、一般成人から二一点、チビツ子から一三点寄せられています。こちらのの方は、昨年よりやや少ない応募となりました。今回寄せられたものは、予備審査、第一次審査、第二次審査を経て、いよいよ二月二日(土)第十一回全国回文コンテスト・交流大会におきまして専門審査員と大会参加者の投票により各賞が決定することになっていきます。

回文の里づくりのこと

回文は、古くから伝わる日本独自のことは遊びです。幕末の仙台に生涯に一千余もの回文を作り、人を喜ばせては楽しむという「廻文師・仙代庵」(一七九六〜一八六九年)がいました。その名は当時、遠く江戸にまで伝わっていたという事です。この仙代庵が作並を詠み込んだ「みな草の名は百(はく)としれ薬なり すくれしとくは花のさくなみ」という名調子の作品がありますが、この回文が刻まれた道標が旧作並街道沿いにあったことや仙代庵が作並温泉開湯の年に生まれていることを縁として、師の偉業の顕彰とともに、回文をこぼ遊びの文化としてそのさらなる発展を図ることを目的に活動を行っているものです。